

## *The Quiet American* II

### —The Innocent—

宮野祥子

#### I

この小論では先に公にした拙論 *The Quiet American* I—Fowler 像を求めて——<sup>(1)</sup> において述べたところの、Fowler が内的に進展し変貌していく契機となったドラマを演ずる彼をとり巻く二人の人物、彼のヴェトナム人の恋人である *Phuong* と 命の恩人であり恋仇となった *Pyle* に焦点をあわせて、彼等に与えられている意義を考えてみたいと思う。それは *Phuong* と *Pyle* の性格を明らかにすることである、と同時に先の論においても述べたように、語り手 Fowler というフィルターを経た二人の映像であるから、彼等の姿を鮮明にすることによって、逆に Fowler 像をも、より明確にすることができるのではないかと思われる。

Fowler が世俗的で経験豊かであり、シニカルな中年であるのに対して、*Phuong* と *Pyle* は Fowler と対称的な若さと純な心をもつ、それだけに恐れを知らない存在である。それは Fowler の表わしている *experience* に対する *innocence* であると言えるのではないかとも考えられる。以下 II 章で *Phuong* について、*innocence* の一要素であるその自然的原始的存在であること、III 章で *Pyle* について、*innocence* のもう一つの要素であると思われる善意と無知を考えてみたいと思う。

なお使用したテキストは William Heinemann 社、1960年版である。

II

Phuong は Fowler の恋人であり、彼と同棲している美しいヴェトナム女性である。彼女は若く真面目なアメリカ人 Pyle の求愛に応じて、一度は Fowler のもとを去り、Pyle と生活を共にするのであるが、Pyle の死によって Fowler のところに帰ってくる。そして Fowler のイギリスにいる妻との離婚成立とともに彼と結婚することになる女性である。彼女は大地がその豊かな生命力の故に決して消滅することがないように、自然の生命力を備えた女性として描かれているようである。

まず〈Phuong〉という名前は灰の中から蘇るという不死鳥〈Phoenix〉(p.3)を意味している。Fowler はシニカルに〈何物も灰のなかから蘇ることはない〉(p.3)と思うのだが、阿片のパイプの用意をしている Phuong を眺めながら、彼女がヴェトナムという土地そのものから生じた、つまり大地に密着した存在であるように思われることを好ましく思っているのである。

I thought that if I smelt her skin it would have the faintest fragrance of opium, and her colour was that of the small flame. I had seen the flowers on her dress beside the canals in the north, she was indigenous like a herb, and I never wanted to go home. (p.8)

(もし彼女の肌の匂いがかぐなら、かすかな阿片の芳香がするのではないかと思うし、彼女の肌の色は阿片の小さな炎の色だ。ドレスに描かれた花を北部の運河のほとりでみたことがある。彼女は草のようにこの土地から生れたのだ、俺は故国に帰りたくない。)

人工の香りではない阿片の香り、小さく燃える炎の色をした肌、そして大地の中から芽生えた草花のような自然の存在である Phuong、或は小鳥のさえずりの様に可愛らしい彼女のおしゃべり、〈小鳥のように華奢な骨格〉(p.5) だという Phuong には自然物としてのイメージが濃厚である。

その自然的であることは、自然物のもっている生への本能的な希求という Phuong の生活態度、或は生活観ともなって表われているようである。Pyle がPhuong に恋をして Fowler の前で Fowler の通訳によって求婚するという奇妙な出来事の後、彼女は一応 Pyle の申し出を拒絶するのであるが、Fowler は絶えず、内心では Phuong が自分から去っていくのではないかと恐れている。彼は妻に出した離婚を願う便りへの返信を読み、その可能性が薄いとは知りつつも Phuong に離婚が可能かもしれないと嘘をつくのであるが、例えばそれに対して彼女は次のように言っている。

“It would not matter so much. You could make a settlement,” she said, and I could hear her sister’s voice speaking through her mouth.

“I have no savings,” I said. “I can’t outbid Pyle.”

“Don’t worry. Something may happen. There are always ways,” she said. “My sister says you could take out a life-insurance,” and I thought how realistic it was of her not to minimise the importance of money and not to make any great and binding declarations of love. (pp. 154-155)

(「そんなに重大じゃないわ。財産契約だって出来るわ」と彼女は言った、それで俺は彼女の口を借りて彼女の姉が話しているのを聞いたような気がした。「俺には貯えはない。」と俺は言った。「パイルと競り合えないよ。」「心配しないで。何とかなるかもしれないわ。いつだって方法はあるものよ」と彼女は言った。「姉さんが生命保険を掛けられると言ってるわ。」それで俺は金銭の重要性を過少に見ることもなく、大それた心を縛るような愛の宣言をしない彼女はなんて現実的なのだろうと思った。)

Fowler は財産契約とか、生命保険を口にする Phuong を現実的と判断しているが、これは同時に彼女のもっている生きるということに対する遅しさである。経済的な裏づけのない生活は、彼女にとっては愛情が打算的であるというのではなく、無意味なのではないだろうか。Phuong にとって生きていくということは Miriam Allot も述べているように <living on simple dreams about security and happiness><sup>(2)</sup>なのである。だから Phuong

は若く希望にあふれ真面目で生活の安定を保証してくれる Pyle を選び、彼との正式の結婚を夢みて生活を始めるのである。だが Pyle の死を Fowler から聞かされた時、彼女は彼の顔を見つめたまま、〈涙もみせず〉〈愁嘆場もなく〉〈ただひとり人生の進路を変更せねばならなくなった人が考え込んでいる〉(p. 18) ように見えるのである。結婚するはずの人の死を知っても涙を少しも流さない Phuong の姿は一見非常に打算的な印象を与えてしまう。しかし彼女にはそのような自分の態度が打算的であるという判断すら、或は打算的ということばすら存在していないのである。それは Fowler が用いている〈子供っぽい〉(p. 132) ということばによく表われている。彼によれば子供のものであって〈They love you in return for kindness, security, the presents you give them.〉(p.132) だと言うのである。愛は親切やプレゼントへの当然の返礼の行為であって、心に何の躊躇いもないし、逆に功利的な計算などはないのである。ただ〈walking into a room and loving a stranger〉(p. 132) というだけで、人を愛するということがどうということなのか理解されていないというのである。だから Pyle の方が正式の結婚という安定した生活を与えてくれると判った時、Phuong は黙って自分の持物を持って Fowler の留守中に Pyle のところへ行ってしまうのである。これは彼女にしてみれば道徳的、或は倫理的にだらしがないということにはならないのである。Pyle が殺害された夜彼の身を案じて Fowler のアパートの入口で待っていた Phuong に向って、Fowler が〈Is he still in love with you, Phuong?〉(p.5) と言うと、彼女は笑って〈In love?〉と答えるのであるが、〈おそらくそれは彼女にはわからない言い方の一つだろう〉(p.5) と Fowler には思われるのである。恋したり惚れこんだりすることばを Phuong は理解できない。これは彼女自身に人を好きになったり大切に思ったりすることがないというのではなく、元来〈Love's a Western word.〉(p. 172) だというのである。そしてこのことばは〈sentimental reasons〉や〈to cover up an obsession with one woman〉(p. 172) を意味しており、ヴェトナムの人々はそのような〈妄念〉に苦しむことはないのだと Fowler は判断している。この考えは Greene がアフリカの原

---

住民達のなかに見出した〈やさしさ〉と共通しているのではないだろうか。人類の原初の姿〈innocence〉を求め、現在の文明の持っている意味を探ろうとした旅行記、*Journey Without Maps*<sup>3)</sup>のなかで作者はアフリカの人々の睦じい姿を描写している。

Their laughter and their happiness seemed the most courageous things in nature. Love, it has been said, was invented in Europe by the troubadours, but it existed here without the trappings of civilisation. They were tender towards their children ( I seldom heard a crying child, unless at the sight of a white face, and never saw one beaten), they were tender towards each other in a gentle muffled way; they didn't scream or 'rag'; they never revealed the rasped nerves of the European poor in shrill speech or sudden blows. One was aware the whole time of a standard of courtesy to which it was one's responsibility to conform. (p.87)

ここに述べてある〈文明という虚飾をつけていない愛〉とは、子供と親の肌と肌が触れることによって確かめられ、満足し、充足するような、愛そのものために存在している原初的な愛、本能をそのまま肯定し、本能的な心の動きに従って行動することがそのまま認められる自然的な愛ではないだろうか。それは Fowler の言う〈To be in love is to see yourself as someone sees you, it is to be in love with the falsified and exalted image of yourself.〉(p.143) 自我の意識を捨てることの出来ない愛ではない。〈I had been faithful to Anne and yet I had injured her.〉(p. 153) という傷つけることなしにはあり得ない愛、〈pride〉や〈humiliation〉(p. 153) なしには人を愛することができない、という文明人の損われた愛ではない。それはアダムとイヴが禁断の木の実を食べる以前の、つまり相手を独占し独占されたいという自我の生れる以前の、まだ愛するということばすらあてはまらないような、二人の住んでいた平安と充足の世界——原初的な無垢の精神ではないだろうか。そこには〈obsession〉というような想念のもたらす苦しみは存在していない。

〈obsession〉のない心は、決して傷ついたり苦しんだりすることはない。

そして *Phuong* はそのような存在だと *Fowler* は言う。

Do you know the kind of polish that doesn't take scratches? That's *Phuong*. She can survive a dozen of us. She'll get old, that's all. She'll suffer from childbirth and hunger and cold and rheumatism, but she'll never suffer like we do from thoughts, obsessions – she won't scratch, she'll only decay. (p.173)

(君は傷のつかない艶出し剤を知っているかい。それがフウォングなんだ。彼女は俺達12人分も永生きするよ。彼女は老いるだろう、それだけだ。出産や餓えや寒さやリュウマチで苦しむだろう、だが決して俺達のように考えや妄念では苦しまないだろう——引っかけ傷はつかなくて、ただ朽ちていくだけだ。)

傷のつかない艶出しのように *Phuong* は想念や妄念によって心が傷つくことはないというとき、彼女が西欧人のもっている悩み傷つけ合うという愛の想念に犯されていないという意味で、精神的な *virginity* つまり無垢であることを言い表わしていると考えられる。だが彼女が人間らしい心の動きに欠けているというのではない。*Phuong* は我々と同様 (scared) (p. 173) 生に怯えている。*Greene* はアフリカ旅行から帰ってきて、イギリスの港の税関で、近くのアパートから聞えてくる赤ん坊の泣き声をきいて、〈There, ..., was Africa: the innocence, the virginity〉<sup>(4)</sup> と思ったと述べているが、その泣き声が表わしている 〈the ancestral fear〉<sup>(5)</sup> と同様の、生きていくことに伴う恐怖を *Phuong* はおぼえているのであって、赤ん坊が 〈too young to speak, too young to have learnt what the dark may conceal in the way of lust and murder〉<sup>(6)</sup> であるのと同じように、彼女は 〈the gift of expression〉 (p.173) を備えていないだけなのである。先述したように生活していくことについては、逞しい知恵も持ちあわせているし、〈She might lie from politeness, from fear, even for profit〉 (p.102) 嘘をつくことも知っている。けれども 〈ロンドンに摩天楼はあるの?〉 (p.102) という質問をするような彼女の無知のもたらす無邪気さと、アメリカとイギリスを混同

することによって、Pyle に心が傾きかけていることが知れても、それを隠そうとする〈the cunning〉(p. 102) を持っていない彼女の心の素直な動きを Fowler は愛しむのである。このような Fowler の気持を、Allot は〈tenderness, selfishness, compassion, pain, respect for human dignity, and a bitter sense of limitation of human faith and love〉<sup>(7)</sup> の混り合った複雑なものであるとし、中でも特に強い要素は〈pity〉であり、それが〈the vulnerability of Phuong〉<sup>(8)</sup> Phuong の無防備であることに、強く働きかけるのだと判断している。けれども一方ではこのような Phuong は Fowler にとっては心安まる救いなのでもある。

Fowler は、努力すればする程お互いが傷つけ合うことしかできなかった妻との葛藤に疲れ、また生涯に一度しかなく、これが本当の愛だと思われるような恋を捨てて、ヴェトナムに来たのであって、愛することに伴う苦しみ、悲しみ、淋しさと孤独を知り尽している彼には、傷つけ合う愛など知らずに生きている Phuong が心安まるのである。この作品は、Fowler の妻からの離婚同意の電報がとどき、Phuong は狂喜し、表面的には happy ending で終るのであるが、この意味において、まことに素晴らしい巧みな ending であると思われる。

“There was so much you could have done together. He was young.”  
“You are not old.”

“The skyscrapers. The Empire State Building.”

She said with a small hesitation, “I want to see the Cheddar Gorge.”

“It isn’t the Grand Canyon.” I pulled her down on to the bed. “I’m sorry, Phuong.”

“What are you sorry for? It is a wonderful telegram. My sister...”

“Yes, go and tell your sister. Kiss me first.” Her excited mouth skated over my face, and she was gone. (p.247)

「パイルと一緒にいろいろなことが出来ただろうに。彼は若かったから。」「あなたは年寄りじゃないわ。」「摩天楼、エンパイヤ・ステイト・ビルディング。」彼女は少し躊躇いながら言った「チェッドア峡谷が

見たいわ。」「それはグランド・キャニオンじゃないよ。」俺は彼女をベッドに引き倒した。「ごめんよ、フゥォング。」「どうしてごめんなさいなの、素晴らしい電報なのに。姉さんは…」「いいよ、行って話しておいで。まずキスをして。」彼女の興奮した唇が俺の顔の上を滑べるようにつけめぐるって、彼女は行ってしまった。

〈ごめんよ、フゥォング〉〈どうしてごめんなさいなの、素晴らしい電報なのに〉と言う Fowler と Phuong には噛み合わない歯車のようなずれがある。それは彼の屈折した愛や嫉妬が全く Phuong には理解されないという； Fowler にとっては淋しさでもあるし、同時にいわゆる愛とか恋ということばでは言い表わし得ない Phuong への愛着をも表わしている。Fowler は生涯に一度という激しい恋をした時、〈愛を失うのを恐れた〉(p. 131) のだが〈今はフゥォングを失うことを恐れる〉(p. 131) のである。彼にとって彼女は〈the hiss of steam, the clink of a cup〉〈a certain hour of the night and the promise of rest〉(p.5) であり、生活そのものである。また時々〈peace〉(p.50) のように眼には見えないうように思われるのである。Fowler にとって Phuong とは激しくお互いを所有しあうことによって傷つきあう相手ではなく、理解されないことを、或は理解できないことを認めて、なお満足し身をまかせて享受する存在なのである。その存在は自我を捨てることの出来ない愛の苦しみを知らない——否定的な意味を内包していない無知——つまり原初的な無垢を秘めていると Fowler には思えるのではないだろうか。だから彼にとって〈peace〉すなわち救いと安らぎになるのではないかと考えられるのである。

### III

Alden Pyle は Fowler の前に、学校を卒業したばかりの、まぎれもなく若く、クルーカットの世間慣れのしていない顔がサイゴンの広場の群衆の中で一目でわかるような青年として姿を現わしてくる。年令32歳、国籍は



アメリカ、アメリカ経済使節団に勤務し、その性格は〈慎重深く、真面目〉(p.20)であり、〈誰のことも批判することはな〉(p.20)く、〈下手な嘘しかつけない〉(p.109)好青年である。Fowler はすでに自分が失ってしまった若さ、真面目さ、素直な心を Pyle のなかに見出し、彼を大切に思い、情愛を感じ始めたのであった。

そして Fowler の心に深い傷と痛みを残して Pyle が死亡した今、Fowler は〈本当にパイルのことを気遣ったのは俺がひとりなのか〉(p.19)と彼に対する怒りにも似た強い愛情を覚えている。彼のこの強い愛着心は、Pyle の死後家宅捜索している警官 Vigot を見つめる Fowler の思いのなかに良く表わされていると思われる。

In Pyle's bathroom Vigot was washing his hands with Pyle's soap and drying them on Pyle's towel. His tropical suit had a stain of oil on the sleeve - Pyle's oil, I supposed. (p.25)

(パイルの浴室でヴィゴがパイルの石鹸で手を洗い、パイルのタオルで手をふいていた。トロピカルの上衣の袖にオイルのしみがついていた——パイルのオイルだ、と俺は思った。)

これは愛する者の持物に勝手に手を触れて欲しくない、愛する者の領域に無関係な他人がみだりに立ち入って欲しくないという、せつない気持の表現であろう。Vigot の袖についたオイルのしみでさえ、Pyle にかかわるものとして、Fowler は気に入らないのである。このような Pyle に対する愛着は、いったいどのようなところから生じているのであろうか。彼が Pyle をどのように理解し、そしてどのように判断していったかを考えてみたいと思う。

Fowler は Pyle について、Vigot に〈God save us always from the innocent and the good〉(p.15)と述べている。これは Pyle の死後、警察署で Vigot が Pyle のことを〈彼は多くの害をなした〉(p.15)と言ったのに対して Fowler が答えたものである。勿論〈the innocent and the good〉は Pyle のことを指していて、Fowler の彼に対する愛惜の気持と、〈場ちがい

なところ〉(p. 16) に来てしまった為に命を失うことになったのであり、本当は〈善良〉な人間だという理解が示されているところである。しかし同時に〈神よ、無邪気で善良な人間どもから、我らを救いたまえ〉ということば遣いから理解されるように〈the innocent and the good〉のなかには、Fowler の皮肉な、或は痛烈な批判が表われているのである。Fowler の現実を冷静に見つめる態度から生れてくる Pyle に対する判断は厳しい。

“Go in and find a table. I had better look after Pyle.” That was my first instinct – to protect him. It never occurred to me that there was greater need to protect myself. Innocence always calls mutely for protection when we would be so much wiser to guard ourselves against it: innocence is like a dumb leper who has lost his bell, wandering the world, meaning no harm. (p.40)

(「なかに入ってテーブルを取っておいてくれ。俺はパイルの面倒をみた方が良さそうだ。」それがパイルを保護しようとする最初の衝動だった—自分のことを彼よりは守る必要があるということは思い浮かばなかった。無邪気とは常に黙って保護を求めるものだ、それに対して我々が身を守る方がはるかに賢いのに。無邪気とは何の害を与えるつもりもなしに世の中を放浪する鈴を失った啞の癩者のようだ。)

啞の癩者という比喩で表現されている〈innocence〉とは、接触すれば我々に伝染する病害を与えるので、我々とは隔離された状態であらねばならないということを表わしている。その意味で癩者を守り保護するということは、同時に我々が自らの身を守るということになるのである。けれども一方では、自分が病害を持った存在であり、他人に害を及ぼし得る存在であることに全く無知であるが故に、その悪意のなさを我々は貴重なものと思い、守ってやらねばならないと思うのである。〈innocence〉である人々にはそのことが全く自覚されていないのであるけれども。従って Fowler が Pyle に向って、〈I know your motives are good, they always are.〉〈I wish sometimes you had a few bad motives, you might understand a little more about human beings〉(p. 172) と言っているように、常に何のうし

ろめたさも心に感ずることのない善意で Pyle は行動するのである。彼はおとなの世界という戦場へ〈his good intentions and his ignorance〉(p.214)で武装してやってきたのである。Pyle のもっているこの善意と無知が具体的に描かれているのが、Phuong への恋と求婚のいきさつなのである。

Greene の作品の中では〈innocence〉ということばは、異性に対して純な心をもっていること、異性間の体験に乏しいこと、性的に無知であることを表わしていることがあるが、<sup>(9)</sup> Pyle の場合も同様である。例えば彼が初めて Phuong に会った時、〈今迄に女性を見たことがないかのように〉(p.34) 彼女をじっと見つめ、頬を染めたり、キャバレーのショーが猥褻であっても、隠語が本当の意味では理解できなくて〈フウオングが微笑すれば微笑し、俺が笑えば不安げに笑う〉(p.50) ところなどである。このような Pyle が Phuong に恋をしたとき、彼は戦場で視察している Fowler を危険をおかして追って来て、Phuong に恋をしたと告げるのである。何故 Fowler がサイゴンに帰るまで待たないかと言えば、Fowler がサイゴンに帰る前に殺されてしまうかもしれないし、彼が帰る迄 Phuong に会わずにいられるかどうかわからない、そうすれば〈honourable〉(p.68)ではないというのである。この正直でありたい。〈unfair〉(p.76)でありたくないということは、Pyle の恋愛事件に一貫して流れていることである。例えば Phuong が Pyle を選ぶと決っているわけではないのだから、身をひいたらどうか、と Fowler が言と、Pyle はそれは Phuong に対して〈fair〉(p.72)でないと言うのである。Pyle によれば二人は正式の夫婦ではなく、Fowler は彼女を理解していなく、子供の欲しい彼女にふさわしいのは自分だから、彼女に求婚しないでは立去れないという理由がある。さらに、Pyle は遂に Fowler の面前で、彼に通訳をさせながら Phuong に求婚するのであるが、その折にも〈僕の言うことを全部聞いてほしいのです。そうでなければフェアじゃないから〉(p.94)と Fowler に向かって言っている。この〈fair〉でありたいということは、Pyle には当然の願いであろう。情熱に駆られてどのような卑劣な手段に訴えても Phuong を奪いたいというのではなく、〈I don't want to sway her emotionally.〉(p.94)と納得して

理性的に彼女が自分を選ぶことを願うのである。確かに Pyle は正当であり当然であるけれども、それは人の心を一面的にしか理解していないのである。彼は自分の言動が Fowler に与える苦しみや淋しさを知ることはできないのである。Pyle は自分の恋を Fowler に打ち明ければ、〈“Whew”, he said, “I’m glad that’s over, Thomas.”〉(p.70) と心安らかになってしまうのである。彼にとっては〈the whole affair would be happier as soon as he didn’t feel mean〉(p.75) というわけである。このような、人の心に対する無知はどこから生じているのであろうか。それは人の心の中に、つまり自分の心の中に悪意を認めていないためだと考えられる。Pyle は〈人を信用すればその人は信頼に価する人間になるのだ〉(p.107) といい、〈I know you’re straight, absolutely straight〉(p.70) と Fowler が正直で真直ぐな人間であることを疑わず、〈He had determined I was behaving well.〉(p.71) Fowler が立派に行動すると決めてしまっているのである。人の心の中にこのように不正や悪意を認めないということは一面では現実離れたロマンティックな考えであり、Pyle は自分の考えと一致しない現実に直面すると、苦痛と失望を目元や口元に浮べる (p.92) のである。それは大人の不正を見つけて怒る子供のようなものである。嘘をついてまでも Fowler が Phuong を手放すまいとしたことがわかった時の Pyle は次のように描写されている。

But there were tears in his voice, and he looked younger than he had ever done. “Couldn’t you have won without lying?”

“No. This is European duplicity, Pyle...” (p.170)

(けれども彼の声は涙ぐんでいた、それで彼は今迄になく若く見えた。

「嘘をつかないで勝てなかったのですか」「そうだよ、これがヨーロッパ人の二枚舌だよ…」)

さて Pyle に形象されている、この純粹ではあるけれども無知であり、同時に善意を備えた性格が政治的な一つの行動として具体的に発展していくとき、それは社会の中に認めてはならない、存在してはならない、とい

う否定的な意味が付与されていくようである。Fowler が Pyle と知り合っ  
て間もなく気付いたように、Pyle は〈個人にではなく、一つの国に、一つ  
の大陸に、世界に役立つ〉(p. 13) という考えに身を固めて、ヴェトナムに  
やって来たのである。彼は自分の考えが正しいと信じて疑わず、心酔する  
York Harding の理論通りに実行し、第三勢力を構成するという行動へ走  
ってしまうのである。その最も昂じた現象が、広場でのあの悲惨な自転車  
爆弾事件である。罪もない市民が、女性が子供が惨殺されたその場面で、  
Fowler は激しく怒りながら、現実が、Pyle の無邪気な〈schoolboy〉(p,  
212) の様な気軽な言動が引き起した現実というものが、どのようなもの  
であるかを、Pyle に確認させようとしている。それは〈the wrong hands〉  
(p. 212) で扱われた善意がもたらした混沌の世界である。しかし前論<sup>100</sup> で  
も述べた如く、その有様を蒼白になりながら眺めていても、靴が血で汚れた  
のを見て、〈大臣に会う前に靴をきれいにしなくては〉(p. 212) とする Pyle  
のなかには、善意のもっている自己本位、〈innocence〉に内在する、自他  
の悪に対する無知、つまり Allot の言葉によれば〈a totally untutored  
moral intelligence〉<sup>101</sup> を見い出すことができるのである。その Pyle の姿を  
見て Fowler は次のように思っている。

He looked white and beaten and ready to faint, and I thought, 'What's  
the good? he'll always be innocent, you can't blame the innocent, they are  
always guiltless. All you can do is control them or eliminate them. Inno-  
cence is a kind of insanity.' (p.213)

(彼は蒼白になり打ちのめされ、気を失わんばかりだった。それで俺  
は思った、言っても何になる？ 彼はいつでも無邪気なのだろう、無邪  
気な人間を非難できない。彼らはいつも罪がないのだから。出来るこ  
とと言えば彼らを支配するか排除するしかない。無邪気は一種の狂気  
なのだ。)

その日の夕方、Fowler は、彼にとっては決定的に人生観を変更してし  
まう程の裏切りへと駆りたてられた Pyle との会談で、Pyle の心の動きを

もう一度探るのであるが、Pyle は Thé 将軍の暴拳を〈the captain of a school-team who has found one of his boys breaking his training〉(p. 229) の様な口調で語るのである。そして爆弾で死んだ人々は〈単なる戦争の死傷者〉〈或る意味では彼らはデモクラシーのために死んだのだ〉(p. 234) と、人の生命が失われたことに何の苦痛も感じていないかのようなのである。それで Fowler は〈自分の身に及ぶ苦痛や危険を想像できないように、自分が他人に与える苦痛を心に思うことはできない〉(p. 47) Pyle の善意と無知の故に、Pyle を〈制御し〉(p. 213), 結果として〈排除する〉(p. 213) ことを選ぶのである。Fowler は一つの社会の中で生きていくということを考えるならば、〈もし人が人間らしくあろうとするならば〉〈おそかれ早かれ、どちらかの側に立たねばならない〉(p. 227) と決断するのである。それはエスカレートした Pyle の行動によって明らかになった〈innocence〉に内在している危険性を、Fowler が認めたからであろう。つまり〈狂気〉(p. 213) という、人間が重んじてきた約束と秩序と常識を無視する、きわめて人間的な文明社会の中では排除するか制御するしかない文明を否定する性質を、Fowler が察知したからなのである。それは多くの死体の散乱している広場で象徴されている、文明とは相容れない、原始的状況への逆行を示す〈slide into barbarism〉<sup>12)</sup> をあらわしていると考えられる。この〈野蛮へすべり落ちていくこと〉ということばは、Greene が1964年11月6日付 *The Time* の編集長宛の手紙の中で用いたことばである。ヴェトナム戦争で拷問にかけられている兵士の写真が、イギリスの新聞に発表されたことに対して、その有様について述べたことばであり、〈the kind of honesty without conscience〉<sup>13)</sup> 良心のない卒直さということばで、その現実に対して目をそむけないでいる人々を皮肉っている。

しかし Fowler の〈innocence〉に対する判断が絶対的に義しいかどうかということは、この作品においては一つの疑問として残されたままである。嘘とかけひきと詭弁と欲望に満ち、望みのない、あまりにも人間的な Fowler にとって、Pyle のような存在は、つまり〈innocence〉であるということ、失われたものに対する郷愁を呼び覚ますものであり、憧憬であ

り、きわめて大切にしておきたいことである、という意味だけではなく、Pyle を否定することが、Phuong にとっては本当に良いことなのかどうかと判断に苦しむ時に、〈どのような決心もこれからはそれ程単純ではなくなるだろう〉(p.240)と未解決のままである。それは換言すれば innocence という根源的な状況に直面することによって、Fowler の今後の生き方が、未決の、不安な状態のなかで選択され続けねばならない、ということが暴露されてしまったという意味で、innocence がその本来の役割を果たしていると言うことができるのかもしれない。

#### IV

前論<sup>14</sup>では Fowler の一側面を、確信から不安へと内的変貌をとげる人間像として捕えたのであるが、その彼の変貌への契機をもたらした Phuong と Pyle に与えられた意義を experience に対する innocence として考察してきたわけである。Fowler と Pyle が愛において経験と無知を表現していることはすでに指摘されていることである<sup>15</sup>が、このことはそのような狭い意味においてではなく、これまで述べてきたように、Phuong と Pyle の全体像からも明らかになることであると思われる。即ち、Phuong においては、innocence が内包している原初の無垢——人間が永遠に憧れ続ける平安が暗示され、Pyle においては innocence が内包する原始的野蛮性——人間を肯定する文明と、それに対立する暴力が暗示されているのではないかと考えられる。従って Pyle に与えられている〈quiet〉という形容詞には、裏面で強く周囲に働きかける力が裏打ちされているという意味で、痛烈な皮肉ともなっていると思われる。

作家 Greene にとって、人類の始原としての童心の無垢性を追求することが、処女作以来の主題そのものの追求である<sup>16</sup>、ともいわれているように、innocence は Greene の描く人間像を規定する尺度にもなっているのではないだろうか。このような意味で Phuong と Pyle には innocence のもっている大きな二つの要素が形象されているのではないかとと思われるのである。

- 註 1 「英米文学研究」第10号 梅光女学院大学英米文学会 昭和49年11月30日発行
- 註 2 *The Moral Situation in The Quiet American*, Miriam Allot, *Graham Greene*, edited by Robert O. Evans, University of Kentucky Press 1963, p. 197.
- 註 3 William Heinemann Ltd. 1962.
- 註 4 同上 p.313.
- 註 5 同上
- 註 6 同上 pp.312-313.
- 註 7 註 2 に同じ p.196.
- 註 8 註 2 に同じ
- 註 9 例えば *The Innocent* (1937) という短篇の中の、純心な思いをこめたラヴレターに、猥褻な絵を、それが一番の愛のことばであると思って描いた童心とか、*The Basement Room* (1936) では女性と遊んだことがない Baines を表わす innocence ということばがある。
- 註10 註 1 に同じ
- 註11 註 2 に同じ p.192.
- 註12 *The Portable Graham Greene*, edited by Philip Stratford, The Viking Press, Inc. 1973, p.598.
- 註13 同上 p.599.
- 註14 註 1 に同じ
- 註15 *The Labyrinthine Ways of Graham Greene*, Francis Leo Kunkel, Sheed & Ward-New York, 1959, p.151.
- 註16 『地図のない旅』解説, 田中西二郎, 新潮社, 昭和29.

なお、本文中のテキストの訳文については田中西二郎訳『おとなしいアメリカ人』（早川書房, 昭44）を参照いたしました。